

第 64 回国際理解・国際協力・多文化共生のための全国中学生作文コンテスト東京都大会 金賞

江東区立深川第六中学校

末木 花歩

課題①

よりよい未来に向けてあなただったら国連の場で何を訴えたいか。

副題

子ども兵士をなくしたい

「僕は二人の人間を殺した」

本に書かれたその一文に、大きな衝撃を受けたのを今でも覚えている。鋭くどこまでも暗い彼の目は、当時の私と同じ十三才とはとても思えなかった。

彼は、子ども兵士だった。子ども兵士とは、十八歳未満の兵士のことだ。深刻な紛争地域では、今でも子どもたちが無差別に拉致され、世界には約三十万人以上もの子ども兵士が存在する。本の中には、信じがたい残酷な現実が、目を逸らしたくなるほどに書かれていた。

特に衝撃的だったのが、チャールズ君の話だ。隣村に出かけた母親を迎えに行く途中、彼は反政府軍に拉致された。数日後、大人兵士たちは彼の母親を目の前に、「彼女の片腕を切り落とせ」と命じた。チャールズ君は震える手で剣を持ち、母親の腕に何度も振り下ろした。

自分が同じ状況に置かれたらどうしていたかと思うと怖くてたまらない。こうして子ども兵の、人を殺すことに対する抵抗感を無くし、逃げ帰る場所さえも無くしていく。最終的に子ども兵の居場所は軍隊しかなくなり、戦うという選択肢しか残らないのだ。

私たちは日々、子供は将来の希望だと言われ、当たり前のように学び、大切に育てられる。しかし子ども兵士はどうだろう。全ての希望は奪われ、戦場では「弾よけ」として使われたり、地雷原を除去装置がわりに歩かされたりと、まるで使い捨ての物のように扱われる。生まれた国が違っただけの同じ子供なのに、平等であるべき命の重さが全く違っていた。

その本に出会ってしばらくして、私は生徒会本部役員になった。ユニセフハウスの訪問を自身の公約にしたのは、そこで子ども兵士について学び、学校みんなに現実を伝えたかったからだ。

ユニセフハウスでは、子ども兵士から救出されたあとのリハビリセンターの話をガイドさんから聞くことができた。壮絶な経験をした子ども兵士は、スタッフ達にも心を閉ざし、なかなか話してくれない。しかし、日本人が訪問した際は、

「日本は戦争をしていないから」

そういつて話してくれたことがあったという。戦争によって苦しめられた彼らは、戦争をしない日本だけには少しだけ心を許せたのだと思う。私はこの話を聞いて、日本が誇らしいと思った。

日本は、非核三原則にのっとり核を一切持たない国。戦争をしない国だ。これから先、不安定な世界になったとしても、これだけは絶対に守っていかなければならないと思う。

また、子どもを戦争に巻き込まないルールづくりは進んでいるものの、決定的な決め手とはなっていないのが現状である。日本は、戦争により多くの犠牲者を出した過去から、唯一学べる国でもある。今こそ日本が先頭に立って、罪なき人々を戦争に巻き込むのはいけないと、世界に訴えるべきだと強く思う。

私もそんな日本の国民の一人として、できることから始めようと思い、子ども兵士についての動画を全校生徒で見ることを提案した。残酷な内容もある動画なため、見せるのは良くないという人もいた。しかし、現実を受け止めて、すぐに子ども兵を助ける必要があると感じてほしい、と説得して、実行することができた。子ども兵士について初めて知ったという人が多く、まずは存在を知ってもらうことが大切だと気づいた。これからも、世界の問題に巻き込まれている子どもたちについて少しずつ発信していきたい。助けたいという気持ちを持ち続けて、いつか世界から子ども兵士をなくそうと思う。